

---

# 流転の化物語

ゼクラス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

流転の化物語

### 【Nコード】

N2416BA

### 【作者名】

ゼクラス

### 【あらすじ】

この物語の主人公は本来の主人公ではない。まったくもって、関係のない人物が主人公である。しかし、本来の主人公は消えたわけではない。ただ単に、主人公が出会うべき出来事にその人物が、何の因果か出会ってしまっただけだ。だが、ただの人がその位置に居座る事は出来ない。その人物は、訳の分からない何かを持っている。そのものである。これはその人物が主人公の位置に移り変わっている。流転した、物語である。無欲な自分ほど灰より無意義なものはない

今の時間は何時だろうか？いつも身に着けている灰色の時計が無  
いから、正確な時刻がわからない。いや、今が何時だろうが遅刻し  
そうになっている事には変わらないな。遅刻しそうになっている身  
としては、この悪意としか思えない私立直江津高校名物（名物かど  
うかは知らないが）の無駄に長すぎる螺旋階段は、幼少の頃から身  
体能力が高いとはいえ、中々にキツイものだなと思う。

こんな無駄に長いものを建設するんであつたら、その空間を他の  
事に有効活用してほしいものである。人が落ちたら大変だろうに  
それはさすがにありえないか。

そして、階段をただひたすらに上がっていく単調な作業のような  
動きをしていると、思い出してしまう。あの決して忘れてはいけな  
い地獄のような いや、自業自得の日々を過ごした春休みを、悪  
夢のような現実のようなゴールデンウィークを、思い出してしまう。  
忘れる事を許されない、忘れてはいけない事をあらためて思い出し  
てしまう。

そんな事を階段を上がりながら考えていると、空から人が落ちて  
きている事に気がついた。唐突すぎて、さすがに唾然としてしまっ  
た。よく見るとクラスメイトの女の子の戦場ヶ原さんだった。まる  
で某ジブリ映画の空から女の子が落ちてくるワンシーンのようだ  
と、詳しくも知らない事で自分は場違いにも例えていた。

というか、こんなくだらない事を考えている場合ではない。戦場ヶ原さんは病弱だ。体育の授業には参加せず、全校集会や全校朝会にも貧血対策で日陰にいる。保健室の常連で、かかりつけの病院があり、遅刻や早退、欠席を繰り返している。自分が三年生からクラスメイトになる前からけっこう有名な話であった。

そんなまるで絵に描いたような病弱な戦場ヶ原さんがあの高さから落ちたら、言うまでもなく怪我をしてしまうだろうな。もしくは死んでしまうかもしれない。大袈裟すぎるかもしれないが、それが戦場ヶ原さんに対する自分の見解であり、思いだ。

自分は持っていたカバンを捨てて落ちてくる位置に着き、戦場ヶ原さんを受け止めた。受け止めたはずだった。実際には受け止めた。戦場ヶ原さんの驚きに満ちたような眼が自分を映し出していたが、そんな事は気にならない。

自分は今、戦場ヶ原さんを普通に受け止めた。あの高さから落ちてきた戦場ヶ原さんを何事もなかったように受け止めた。そして、何よりも自分が混乱している事は、戦場ヶ原さんが軽すぎた事だった。

戦場ヶ原ひたぎ、彼女には体重と呼べるものが、限りなくなかったのであった。

戦場ヶ原さんが、ただの病弱で儂げな女の子ではないと理解し、自分が今までに戦場ヶ原さんに対しての見解と思いが崩れ、変わった瞬間でもあった。

「戦場ヶ原さんについて、その、ちょっと教えてくれない？」  
「戦場ヶ原さん？」

唐突な問いかけに、羽川さん……あ。さん付けはしなくていいって言ってたな。訂正。唐突な問いかけに、羽川は首を傾げた。

「戦場ヶ原さんが、どうかしたの、豪良くん？」  
「えっと、三年生になって初めてクラスメイトになったけど、噂とかは耳に入ってくるけど実際のところどんな人かは知らないから、気になって聞いてみようと思ったただだよ」

少しもって不自然だったけど、まあ言い訳にしては及第点だな。  
でも 羽川はそれでも見破ってしまうだろうな。

「ふうん」

……やっぱり、見破ってるな。

「あと、戦場ヶ原ひたぎって珍しい名前だと思わない？下の名前が特に」

自分が言えた義理ではないけどな。豪良絢爛<sup>ごうりょうけんらん</sup>。上も下も、戦場ヶ原ひたぎに負けず劣らずの珍しいマイネームだ。ハガキにペンネームとして書いて送っても違和感はないな。代償は自分の名前が痛い名前だと理解する事だけ。

「戦場ヶ原さんの名前って、そんなに変わってるかな……：戦場ヶ原ってというのは地名性で、ひたぎは、土木関係の用語じゃなかったっけ？」

一般常識としてあたりまえのように、羽川は、平然と言ったのけた。このように、普通は知らないようなことを、羽川が言うときに自分は決まって、ある一連の流れをする。

「羽川は何でも知ってるよね」

「じつ言つと」

「何でもは知らないわよ。しってることだけ」

こう返ってくる。羽川翼。クラス委員長の彼女のお決まりの名台詞だ。一つ言っておこう。羽川はただのクラス委員長じゃない。三つ編みに眼鏡をかけて、清く正しく真面目に生き、教師受けも良く、委員長の中の委員長なのだ。真面目な委員長などは漫画やアニメ、現実でもだいたい、良い子ちゃんぶってんじゃねーよってきな

感じで虐げられたりするものである。しかし、羽川はそれを起こさせないほどの真面目っぷりだ。五教科六科目で百点満点なんてのを出すくらい真面目で、今まで嘘をついた事が無いと言えるほどに真面目である。それ故に羽川は委員長の中の委員長なのだ。断言できる。

「文化祭って言っても、私達、もう三年生だからね。さしてすることも無いんだけど。受験勉強のほうに大事だし」

自分もその意見に賛成だ。三年にもなると一年のときとは色々と違ってくるしな。というか、今更だが五月八日の放課後、ゴールデーンウィーク明けに自分達は文化祭について話をしている。なぜ自分がクラス委員長の羽川と文化祭について話しているかということ。

「今更だけど、何で自分が放課後に残って文化祭の計画をしないといけないんですか。羽川委員長」

「きみを更生させるためだよ。豪良副委員長」

と、言うのだった。自分はなりたくなかったのに副委員長にさせられ、羽川が「きみを更生させてみせます」と、宣言をし、更生させようとしているのである。羽川の中では、自分は更生すべき人物として確定して欲しい。自分は問題児でも不良でもないだろうに。多分だけど。更生させるべき人物は他にいないでしょ。

「更生させるなら自分ではなく、暦くんのほうじゃないか？」

「阿良々木くんは、きみがいるから大丈夫でしょ。豪良君」

羽川は、確信しているがごとく言う。

「自分は暦くんの保護者じゃないんですよ……」

友達ではあるけど。阿良々木暦。自分は暦くん（本人はそう呼ばれるのを嫌がっている。昔からの呼び名は今では恥ずかしいらしい）と呼んでいる。ご近所さんで幼馴染であるため、昔から阿良々木家とは付き合いがあり、お世話になっている。自分が暦くんを更生させるべき人物と言うのは、色々と込み入った理由があるが、その一つにあいつは友達が羽川と自分を含めて二人しかいないと言えば分るだろう。その原因は暦くんと自分の、軽すぎる単純な動機で動いた結果のせいなのだが、それは追々語っていくだろう。

「　　はあ、愚痴を言っても仕方ないし、文化祭の話をしますか」

愚痴というか、うちわ話というか、ただの世間話である。

「そうだね。じゃあ、出し物から決めていこうか。漠然としたアンケートじゃ意見がばらけちゃって時間がもつたないから、あらかじめ私達が候補を絞つといて、その中からクラス選ぶつので、いいかな？」

「それでいいと思うよ。出し物は変にチャレンジしたものよりも万人受けするような平凡なのがいいとおもっよ。そのほうがこっちも楽しめると思うし」

「そうすると、お化け屋敷や喫茶店とかが定番になってくるね」

「だろっね。去年も一昨年もそんな感じだったしな……あ。そう言えば暦くんが、去年も一昨年も戦場ヶ原さんは文化祭に参加して



いないって言ったな」

曆くんが言うには、他の行事でも参加していないらしい。体育祭は言うまでもなく、社会科見学、修学旅行、野外授業、全ての行事に参加していない。激しい運動をしないものにも、参加はしていないらしい。これは病弱だからの一言で片づけるのはいささか無理がある。だけど、あの体、体重が全くもってないようなあの体なら話が付く。人を避け続けている行動にも納得がいく。

「そんなに気になるの？戦場ヶ原さんのこと」

「あー、まあ、そうかな」

あんな事があつて、気にならない奴なんていない。得に自分にとって、戦場ヶ原さんの軽さは錯覚などで誤魔化せるものじゃない。あれは、自分のそれらと同類だ。

「やっぱり、豪良くんもアレだけど男子だもんね。病弱な女の子、男子は好きだもんねー。あー、やだやだ。汚らわしい汚らわしい」

からかうような、変わったテンションでいう羽川。

「さりげなく、自分のやや中性の顔とアレな所を弄らんでくれ」

中性でも童顔でもない、女よりも男よりで、やや中性である。断言できる。アレに関しては否定はしない。遠回しに言ってくれた配慮にはありがたいけど。

「あはは、ごめんごめん。でも、阿良々木くんに聞いたなら私に訊かなくてもいいんじゃないかな？なんつたって、三年連続で同じ

クラスだっというんだから」

「暦くんも自分とたいして変わらない情報しか持っていなかったよ。何より、異性よりも同性の方が知ってると思ってるって訊いたんだよ」

羽川が知っていることの中には、クラスメイトのことは入っているだろうしな。

「確かに、異性よりも同性のほうが知っていることが多いとおもっけど、それをおいそれと教えてあげるわけにやいかないでしょうが、異性の豪良くん」

「うん。そりゃそうだね」

少し呆れるような感じで言われた。少しばかりデリカシーの欠ける問いかけだったな。訂正しよう。

「じゃあ、クラスの副委員長が、クラスメイトの戦場ヶ原さんを通じてかしらうと思って、クラスの委員長に質問していると思って答えてくれ」

「そうくるか」

羽川はそう言うと、さきほどから話をしながら書いていた走り書きを止め（出し物の候補などを書いては消しをしていた）、ふうむ、と考える素振りをし、手を束ねた。

「ああ、でも優等生とか、頭がいいとか、そういう自分でも分かるようなこと以外のを教えてください」

それくらいのごとは暦くんからも聞いたしな。

「うん、そうなってくるとう豪良くんみたいして変わらないと思うよ。同じクラスになって、丁度一ヶ月くらいだしね。ゴールデンウィーク、挟んじゃってるし」

「それでもいいから。知ってること、思ってることだけでいいから話してくれ」

ゴールデンウィークはタブーだ。あまり、会話に出すものではないな。自分はそう見解をしている。

「じゃあ、話すね。戦場ヶ原さん、口数も多いほうじゃないし、友達も、全然、いないみたい。色々、声をかけてはみてるけど、彼女の方から、壁作っちゃてる感じで」

「まあ、だろうね」

あの様子じゃ、この一か月でクラスメイトと話したことは、一言、二言もないだろうな。それでも、色々と声をかけているのは、さすが羽川と、言わざるをえないな。

「あれは 本当に難しいわ」

羽川に、そこまで重く判断されるということは 本当に重いなとなのだろうな。

「やっぱり病気の所為なのかな。中学生のときは、もっと元気一杯で、明るい子だったんだけどね」

「えつと、羽川は、戦場ヶ原さんと同じ中学校だったのか？」

「え？あれ、それを知ってて私に訊いたんじゃないの？」

さも驚いたような表情を浮かべた。初耳だ。というか、自分は羽川のように何でも知ってるわけではないので、羽川の基準で考えられても困る。今だに彼女は、自分のことを『ちよと真面目なだけが取り柄の普通の女の子』と、思ってるらしい。いい加減、自覚してほしいものである。自身が正しすぎることを。

「うん、そうだよ。同じ中学校出身。公立清風中学。もともと、同じクラスだったことは、やっぱりないけれど　　戦場ヶ原さん、有名だったから」

羽川も、今と変わらず有名だったろうな。

「すごく綺麗だったし、運動もできたから」

「運動もつてことは、何か部活をしていたのか？」

「陸上部で、スターだったんだよ。記録も、いくつか残っているはず」

今とは、まるで真逆だな。想像してもしっくりこないな。

「だから、話だけなら、色々聞いたもんだったよ」

「どんな話？」

「すごく人当りのいい、いい人だった話。わけ隔てなく誰にでも優しいって、そこまで言えば言い過ぎじゃないのかってくらい、いい人で、しかも努力家って話。なんか、お父さんが外資系の企業のお偉いさんらしくって、おうちもすごい豪邸で、すごいお金持ちなんだけれど、それでも全然気取ったところがないんだって話。高みにあって、更に高みを目指しているって話」

「まさに、完璧超人って奴か　　全部、当時の話だろうけど」

今は、その話の面影を一切感じられない。

「そうだね。高校に入って、身体を壊した、みたいなことは、一応、聞いてはいたんだけど。それでも、だから、実を言うと、今年、同じクラスになって、びっくりした。間違っても、あんな、クラスの隅の方にいる人じゃなかったはずだもの」

私の勝手なイメージの話だけれど、と羽川。そのイメージは、話を訊くかぎりはあっているだろうな。野球に命をかけた人が、肩を壊し、二度と球を投げ、バットを振れなくなれば。サッカーに人生を尽くした人が、足を壊し、二度と大地を駆け、ボールを蹴れなくなれば。そんなことになれば、誰だって変わってしまうだろう。戦場ヶ原さんだって、陸上部のスターだったのだから、そうだろう。それが、ただの病気なら、今朝のことがなければ、そう言えただろう。

「でも　こんなことを言っちゃいけないんだろうけど、戦場ヶ原さん」

「どうかした？」

羽川は、珍しくどもって言った。

「うん。今の方が　昔より、ずっと綺麗、なんだよね」

「それは」

「存在が　とても、儂げで」

存在が儂げ。それは一見、不謹慎な発言にみえるが。戦場ヶ原ひたぎ。軽すぎた彼女のことを表すのに、十分過ぎるほどに、的確な見解である。断定できる。

「あつ。そういえば、自分、忍野さんに呼ばれてるんだっとな」

「え？忍野さんに？何で？」

「仕事の手伝い、だ」

「ふ、うっん？」

羽川は微妙な反応を見せる。さすがに露骨すぎたな。これじゃ赤点ものだ。そもそも、羽川に嘘（まるつきり嘘というわけでもない）をつくこと事態、無謀だな。

「そういうわけで、自分、そろそろいかなといけないんだ。羽川、今度埋め合わせするから、後のこと、頼んでいいかな？」

自分は席を立ちながら、やや不自然に続けた。

「そう言うなら、今日はいいわ。大した仕事も残ってないし、今日は勘弁してあげる。忍野さんを待たせても悪いしね」

羽川は、それでも、そう言ってくれた。忍野さんの名前が聞いたみたいだ。自分にも、羽川にとっても忍野さんは恩人だしな。その辺りも計算しての発言だったけど。

「じゃあ、出し物の候補は、私が全部決めちゃっていい？後で一応、確認だけはしてもらっけれど」

「うん。羽川が決めるなら大丈夫だろうし、任せるよ」

「忍野さんによるしくね」

「しつかりと伝えておくよ」

そう言い、自分は教室から出た。

教室から出て、扉を閉め、歩き出すと、

「羽川さんと何を話していたの？」

と、背後から声を掛けられた。その声は聞いたことがある。今日も聞いた、授業中に教師に当てられて発する、『わかりません』と同じ声だ。そして、その声の主に向けて振り向く。

「戦場が」

「動かないで」

戦場ヶ原さん と、振り向き、言おうとしている最中に、静止の言葉をなげかけられた。そして、狙い澄ましたように、自分の口腔内に、伸ばしきったカッターナイフの刃を入れられた。自分の左頬内側に、それが凶器として触れている。

「はらっ……！」

「ああ、違うわ 『動いてもいいけど、とても危険よ』というのが、正しかったのね」

予想外すぎる。普通にカッターナイフを口腔内に入れてきたな。こいつ。加減せず、乱暴にもせず、ぴたりと刃を口腔内に触れている。手馴れている？自分に冷えた目を向け、揺るがずにそんな真似ができるとはな。戦場ヶ原ひたぎ。動いたら、本当にやるだろう。断定したくないな。

「好奇心というのは全くゴキブリみたいね 人の触れられたくない秘密ばかりに、こぞつて寄ってくる。鬱陶しくてたまらないわ。神経に触れるのよ、つまらない虫けらごときが」

「……さて。落ち着いて」

落ち着いて？自分は、何を馬鹿なことを言ってるんだ。落ち着いて考えろよ。戦場ヶ原ひたぎは普通に、あたりまえのように脅迫しているぞ。冷静さを失うな。焦らず考える。

「私は落ち着いてるわ。それより、何？右っ側が寂しいの？だったらそう言ってくれればいいのに」



思考させる余地もなく、戦場ヶ原ひたぎは左手に ホツチキスを持ち、空いている左側の頬に差し込んできた。綴じる形で、緩く 挟まれる。

「か……」

薄くて鋭いカッターナイフを口腔内に差し入れて口を開けさせ、すかさず相手が発言をする前にホツチキスを入れる 計画的犯行としか考えられない、計算された手際の良さだ。まるつきり、相手のペースだ。行動できない。

「全く私も迂闊だったわ。『階段を昇る』という行為には人一倍気を遣っているというのに、この有様。百日の説法屁一つとはよく言ったものだわ」

そんな知らなくてもいい、難しい言葉を使いこなせるほど賢いなら、武力ではなく知力を使って、穏便に済ましてほしかったな。人らしく。

「まさかあんなところにバナナの皮が落ちているだなんて、思いもしなかったわ」

「……………」

自分はバナナの所為でこんな目にあっているというのか。自分はバナナが好きでも嫌いでもなかったが、大嫌いになりそうだ。

「気づいているんでしょう？」

戦場ヶ原ひたぎは自分に問う。目つきは剣呑なまま、問うてくる。

「そう、私には 重さがない」

体重がない。人との身には考えられないほど、軽い。

「といっても、全くないというわけではないのよ 私の身長・体格だと、平均体重は四十キロ後半今日というところらしいのだけれど」

受け止めたときに感じたものには、そんな重さ、微塵も感じられなかった。

「でも、実際の体重は、五キロ」

軽い。生まれたばかりの赤ん坊と、そう変わらない。それが人間一人に分散しているなら 実感としては、体重がないのと等しい。自分が受け止められたのも、当然だろう。

「まあ、正確を期すなら、体重計が表示する重量が五キロというだけなのだけれど 本人としては自覚はないわ。四十キロ後半強だった頃も、私自身は、今も、何も変わらない」

人間がその大きさを五キロというのはありえない。世界の常識で考えると、数学やらの問題になってくる。だが、これはそういう常識の問題じゃない。

「何を考えているかわかるわよ」

「……………」  
「胸ばかりみて、いやらしい」

「……………」

そんなことは考えていない。断定できる。劣情は自分にはない。  
三者混合の自分には。

「底の浅い人間はこれだから嫌になるわ」

劣情以外に関しては、自分は底の浅い人間だな。その結果が今の自分なのだから。

「中学校を卒業して、この高校に入る前のことよ」

戦場ヶ原ひたぎは言った。

「中学生でも高校生でもない、春休みでもない、中途半端なその時期に 私はこうなったの」

「……………」  
「一匹の 蟹に出会って」

蟹 あの海にいる、冬に食べる蟹のことだろう。動物としては、自分のも似たようなものだろう。

「重さを 根こそぎ、持っていかれたわ」

「……………」  
「ああ、別に理解しなくていいのよ。これ以上かきまわられたらすごく迷惑だから、喋っただけだから。豪良くん。豪良くん ねえ、豪良絢爛くん」

戦場ヶ原ひたぎは。役者のような言い回しで、自分の名前を、重ねて、呼んだ。

「さて、私は、あなたに私の秘密を黙っていてもらうために、何をすればいいのかしら？ 私は私のために、何をすべきかしら？ 『口が裂けても』喋らないと、豪良くんに誓ってもらうためには、どうやって『口を封じれば』いいかしら？」

カッターナイフとホッチキス。どちらか、それとも両方ってか？ 正気で狂気だな。こいつ。だが、それを行ってしまうほどに、戦場ヶ原ひたぎにとっては、長かったのだらうな。高校生になってから、ずっとそうだった、というのは。自分は年期に関しては、それ以上だが、思いがちがう。戦場ヶ原ひたぎと自分とでは、受け止め方も状況もちがう。生き方も。ちがう。

「同情してくれれるの？ お優しいのね」

戦場ヶ原ひたぎは、吐き捨てるように言った。同情はしていない。共感はしたが。

「でも私、優しさなんて欲しくないの」  
「……………」

「私が欲しいのは沈黙と無関心だけ。持っているならくれなひかしら？ 女の子のような綺麗なほっぺた、大事にしたいでしょう？」

戦場ヶ原ひたぎは。そこで、微笑んだ。

「沈黙と無関心を約束してくれるのなら、二回、頷いて頂戴、豪良くん。それ以外の動作は停止でさえ、敵対行為と看做して即座に攻撃に移るわ」

本気の発言であることは、その目を見ればわかる。自分は二回、

確かに頷く。

「そう」

戦場ヶ原はその選択に安心したようだ。選択の余地がこちらにはなく、同意しか残されていないにもかからわず　自分がそれに応じたことに、安心したらしい。

「ありがとう」

戦場ヶ原ひたぎはそう言って、カッターナイフを、誤って口腔を傷つけないようにと、ゆっくり、緩慢な動作で、抜く。配慮はしてくれたような手つきだった。抜いたカッターの刃を仕舞い、そして、ホッチキスを。

「……………あがつ！？」

がじゃこつ、と。ありえないことに。ホッチキスを　綴じた。自分はその痛みに対応して、その場に、膝をつき、頬を抱えるように押さえた。

「う……………ぐ」

「悲鳴を上げないのね。立派だわ」

どうでもいいように　戦場ヶ原ひたぎが、上から言った。見下すように。虫ごときを見るように。

「今回はこれで勘弁してあげる。自分の甘さが嫌になるけれど、約束してくれた以上、誠意をもって応えないとね」

「……………」

何も言わない。これ以上、何か発言しても、己が状況を悪化させるほかならない。

「それじゃ、豪良くん、明日からは、ちゃんと私のこと、無視してね。よろしくさん」

そう簡潔に言い、戦場ヶ原ひたぎは、用済みと言わんばかりに、自分に目もくれずに、そのまま廊下を歩いていった。そして、角を折れて、その後ろ姿が見えなくなると、自分は無言で立ち上がる。

「……………」

自分は、口腔内にあるホツチキスの針を、手を入れて、確認し、迷いなく、そのまま引っこ抜く。血は少ししか出ない。

「く……………」

このぐらい大丈夫だ　半分以上しか感じない。針が完全に綴じず、コの字で刺さってたのが幸いだったな。綴じてようが、開いていようが、あまり自分には関係ないが。どっちにしたって、感じる痛みは大差ない。抜いたホツチキスの針を折りたたみ、ポケットにしまう。証拠は隠さないとな。

「あれ？豪良くん、まだいたの？」

教室から、作業が終えたららしい羽川が出てきた。グッドタイミングだ。戦場ヶ原ひたぎとの、一方的な話し合いの最中に出てこられたりしたら、自分が声を抑えていたことが、無駄になるところだった。

「忍野さんのところ、早くいかなくていいの？」

何も気づいていないようだ。これは自分が声を抑えていたからなのか。あれほどの事をやってのけたに、羽川に悟らせない、戦場ヶ原ひたぎの手際の良さなのは、わからないな。後者だろうけど。

「今からいくよ。羽川、バナナを階段で食べたことある？」

「え？いや、食べたことないけれど。そもそも、階段で食べるよ。うなお行儀が悪いことしないよ。」

「羽川さん、愛してるよ！」

「ええっ!？」

「そんじゃね」

そう言つて。羽川が自分の突拍子もない発言に、戸惑っている間に、羽川の横を抜け、駆けだした。「えっ、あつ……。あー！こ、こら、豪良くん、からかったね！あと廊下を走つちや駄目！先生に言いつけちゃうよ！」と、羽川の委員長らしい声、が後ろから聞こえるが、聞こえない。スルー。あれ以上話していると、悟られかねないしな。

駆ける。そのまま、駆ける。角を折れたところには、階段がある。戦場ヶ原ひたぎが降りたであろう、階段がある。ここは四階だから、たいしては離れてはいないだろう。現に、微かに軽い足音が、聞こえる。幽かに、聞こえている。そのまま三階、二階、と駆け下つていき、そして二階から一階への階段の途中に。いた。既に、自分に気づいていて、振り返っている。

「……………呆れたわ」

そう、冷めた目で言いはなった。

「いえ、ここは素直に驚いたというべきね。あれだけのことをされておいて、すぐに反抗精神を立ち上げることができたのなんて、覚えている限りではあなたが初めてよ、童顔のくせに、根性はあるみたいね。豪良くん」

「……………」

覚えている限り。高校生になってから、今現在まで。知った者全てに脅迫し、傷つけ、拒絶してきたのか。戦場ヶ原ひたぎは忘れてしまうほどに。生き方。思い。受け止め方。自分とは全く違う。戦場ヶ原ひたぎに対する、あらたな見解が生まれた。

「……………何か言葉を発したらどう？それとも、口の中が痛すぎて、喋れないのかしら。それなのに、何も考えずに追いかけてきたなんて、愚かとしかいいえないわね」

「……………」

無言で、無表情で、見る。

「……………そう。いいわ。分かった。分かりました、豪良くん。『やられたらやり返す』というその態度は私の正義に反するものではありません。だから、その覚悟があるというなら」

戦場ヶ原ひたぎはそう言い、両腕を広げた。その両手には、カッターナイフとホッチキスという、脅しに使用したものを始めに、多



種多様な 凶器という名の文房具が、握られていた。そして。

「戦争を、しましょう」

宣戦布告をした。血の気の多い いや、それにしても冷静すぎるな。現実主義。リアリストってところか。こういう奴は、思考させるような曖昧で的確な言葉を言い、確かな証拠を示さないと、けっして、理解も納得もしない。戦場ヶ原ひたぎ。彼女を説得するための言葉と証拠は既にそろっている。そして、自分は初めて戦場ヶ原ひたぎに対して、言葉をなげかけた。

「不思議とは思わなかったかな？自分を見たとき、やや灰色があったこの髪ことを。こんな髪をしている自分は異常だ。普通では、ありえない きみの軽さのように、ありえない」

「……何が、言いたいのか」

戦場ヶ原ひたぎは、戸惑ったような、困惑したような 考えるような表情をした。あとは、証拠を示すだけだ。そして、その証拠は、戦場ヶ原ひたぎが用意してくれた。

自分は、唇の右端を指で引っ張り、右頬の内側を、晒した。

「え？」

戦場ヶ原ひたぎは、驚いたようだった。ぼろぼろと、文房具を落とし、文房具という名の武装を解いた。

「あなた それって、どういう」

ホッチキスの針が刺さって出来たはずの、口の中の傷は、無かつ

た。跡形もなく、治っていた。

「自分は、戦場ヶ原さんと同じだ。そして、救われている。自分は戦場ヶ原さんの力になれる。断言できる。話 聞いてくれるかな？」

コンプリート。救われているというのは、少しばかり着色しているが、とりあえずは停戦できたな。武装解除もできた。あとは、和平を結び、先進国さんからの、自分達こと発展途上国への支援を得るとするか。

幼少のころである。自分は鼠に出合った。だがそれは、哺乳類ネズミ目の数科の総称の鼠ではない。姿形は普通の鼠で、燃え尽きた後の、灰のような色をしていたが、鼠ではない。好奇心なのか、怖いもの見たさなのか、ただ単に動物と触れ合いたかったのか、幼少の自分は、相手が見た目は動物にも関わらず、幼いが故に、『いっしょに遊ぼう』と、言った。誘ってしまった。招いてしまった。気づいたときにはもう遅かった。鼠は消えていた。

そして、灰色に染まった、死灰になった自分だけが残った。

もちろんのこと、死んではない。ただ奪われたただけだ。睡眠欲二分の一、食欲二分の一、性欲二分の一、味覚二分の一、嗅覚二分の一、を奪われた。そして、身体能力、思考能力、精神力、聴覚、視覚、が奪われた分を埋めるように、上がった。一見、正当な等価交換におもえるが、それは違う。それで出来上がったのは 無欲で、達観した、機械のような、灰眼灰髪の幼き自分である。

そこまでならまだ間に合った。その唐突で理不尽な出来事を変えようと、？ 戻ろうと、努力すれば間に合えた。しかし、自分はそうしなかった。幼少の自分は、三大欲求と二つの感覚が二分の一になってもいいと、こつちの方が便利でいいと、判断した。それは効率を求めて、何も考えず最適な行動をする、機械のような選択であった。少なくとも、人間の選択ではなかった。

鼠 いや、灰鼠は消えていない。どこかにいつてしまったのではなく、そのときから、自分の中にいた 招いてしまっていた。余燼として、残り続けていた。そのように、生き続けてきて、これからも死灰のように生きていくと考えていた。だが、二度あることは二度あるように、一度起きたことは、二度起きる。

高校三年になる手前の春休みに 自分は吸血鬼に襲われた。血も枯れるような、美人であった。自分が欲を寄せてしまうほどに、とても 美しい鬼であった。

今は学ランのカラーと、うなじを隠すぐらいの長めの髪で隠れているが、今でも、その首筋には、彼女に咬まれた痕跡が、深く残っている。物語とかでは、人が吸血鬼に襲われたら、吸血鬼専門のハンターや、キリスト教の特務部隊なり、吸血鬼でありながら同族を狩る吸血鬼殺しなどが、助けしてくれるものだけど、自分の場合、通りすがりのおじさんに助けられた。そして、そのとき自分は、灰鼠がなければ、どうしようもないくらい、役に立たない存在なのだと痛感した。

それで、自分は、今の状態に戻れたが その影響というか後遺症で、新陳代謝など、回復力方面が上昇した。その結果、吸血鬼と鼠と、人間の、入り混じった 三者混合の自分が生まれた。二者混合のときより、髪も灰色ではなく、やや灰色になって、能力も色々と混ざってしまっているが 今ではその方が、人間味が増している。場違いな思いたが。

「忍野 忍野さん？」

「うん。忍野メメさん」

「忍野メメ、ね なんだか、さぞかしよく萌えそうな名前じゃないの」

「名前とは違って、ただの三十過ぎたおじさんだよ」

「あっそう。でも子供の頃は、さぞかし萌えキャラだったのじゃないかね」

「たぶんね。というか、萌えキャラとか分かる人なのか？」

「これしき、一般教養の部類よ」

戦場ヶ原さんは平然と言った。そんな一般教養があるとは、自分は知らなかったな。

「私みたいなキャラのことを、ツンデレって言うのでしょうか？」

「……たぶん、そうだよ」

キミみたいなキャラはツンヤンって感じだな。ツンケンしていて病んでいる。今の戦場ヶ原さんに、ぴったりな言葉だ。自分はその見解している。閑話休題。

自分達は、私立直江津高校から、自転車で二十分くらい離れた先、住宅街から少し外れた位置に建っている、学習塾に向かっている。正確には、建っていた学習塾にだ。多種多様な警告を告げる看板が乱立していて、見事な廃墟と化している学習塾に。忍野は住んでいる。春休みから、一カ月間、ずっと居る。

「それにしてもお尻が痛いわ。じんじんする。スカートに皺がよっちゃったし」

学習塾に着き、戦場ヶ原さんは自転車から降りて、そう言った。

「自転車の二人乗りはしたことはないのか？」

「ええ、自転車の二人乗りなんて初めての経験だったわ。だから、もっと優しくしてくれてもよさそうなものじゃないの」

「確かに、配慮が足りなかったね。謝るよ」

「謝って済む問題ではないわ。切り落とすわよ」

非を認めたら切り落とされそうになった。予想外。

「……戦場ヶ原さんを相手にするには、忍耐力が必要なようだね……」

「豪良くん。その文脈だと豪良くんじゃなくて私の性格が悪いみたいに聞こえるわよ？」

そう言いました。さりげに、自分が性格が悪いといわないでほしい。ひねくれているけど、全身凶器な、きみよりかは悪くない。

「おっと、そうだった」

戦場ヶ原さんのことを考えて、人が入ることが可能な、大きめのところを探し、たどり着いたところで、自分は思い出し、戦場ヶ原ひたぎに振り向いた。

「きみが持っている文房具、自分が預かる」

「え？」

「預かる。だから、全て出せ」

「え？え？」

理不尽な、訳の分からないことを要求されたような、驚いたような顔をする戦場ヶ原ひたぎだった。頭がおかしいんじゃないのと言いたげな感じでもあった。

「忍野さんは、一見、変なおじさんだけど、自分の恩人なんだ。」

断言できる」

自分が人間の心になったとき、助けくれたのは忍野さんだ。恩人だ。それに、羽川の恩人でもある。

「その恩人たる忍野さんに、危険人物を合わせるわけにはいかない。だから、文房具は、自分が預かる」

「ここに来てそんなことをいうなんて」

戦場ヶ原日ひたぎは自分を睨む。

「あなた、私を嵌めたわね」

「……………」

嵌めてなどいない。妥当な要求である。しかし、戦場ヶ原日ひたぎは、自分を恨めがましいように睨んでくる。やがて、戦場ヶ原日ひたぎは、「了承したわ」と、妥協したように、言った。

「受け取りなさい」

そして 戦場ヶ原さんは、身体中のあちらこちらから、様々な文房具を、取り出してきた。あのとき、階段で見せたものは、どうやらほんの一部でしか、なかったようだ。鞆に入りきらないようなこの量を、いったい、どう隠していたんだろうか。不思議だ。

「勘違いしないでね。別に私は、あなたに気を許したというわけではないのよ」

「分かってる。そんな思い違いはしていないよ」

こんな短時間で、気を許す奴は人が好いとはいわない。ただの愚鈍だ。

「いいこと？もしも私から一分おきに連絡がなかったら、五千人のむくつけき仲間が、あなたの家族を襲撃することになっているわ」

戦場ヶ原さんの矛盾しか見られない発言だった。

「そんな事言わなくていいよ……余計な心配もしなくていい」

「一分あればこと足りると言うの！？」

「……知らねえよ」

戦場ヶ原ひたぎの問いかけは、心底無意義なものだった。答えるものでもない。

「ああ、私としてはうっかりしてたわ。あなたの家には今、親がいなかったわね　でも、妹のように可愛がっている二人はいたわねえ」

「……………」

家庭事情と友好関係を把握されていた。嘘や冗談は言うが、本気ではあるらしい。自分は全然信頼されていないみたいだ。忍野さんは、こういうのは信頼関係が大事だと言っていたから、この状況はあまりよくはないな。まあ、それはいいだろう。自分は案内者としての役目を果たすだけだ。

敷地内に入って、学習塾の中に這入る。まだ太陽は沈んでいなく夕方だけど、建物の中のため、かなり薄暗い。四階建てのビルディングであった面影はなく、見事に荒れ果てていて、足元を注意しなければ躓きかねない。



「……案内するよ」

だから、戦場ヶ原さんの、手首の部分を握るようにして、自分は彼女を導いた。そうしなければ、戦場ヶ原さんはまともに、ここを歩けないだろう。十分の一の体重の彼女には、そこに落ちている空き缶程度のゴミは、十倍の質量を持ったゴミになる。立派な障害物となっている。速さは十倍でも、強さは十分の一になっている。文房具を手放したくなかった理由はそれだろう。そういえば、戦場ヶ原さんは鞆を持っていない、というより、持てないのだろう。持つには重すぎて。

「何よ」

唐突な行動だったので、戦場ヶ原さんは面食らったようだったけど、素直についてきてくれた。

「感謝するなんて思わないでね」

「わかってているよ。このぐらいことは、案内者として当然のことだしな」

「当然だわ。むしろあなたが感謝なさい」

「それは当然ではない？」

「あのホッチキス、傷が目立たないようにと思って、わざと、外側じゃなくて内側に針が刺さるようにしてあげたのうよ？」

「……………」

本当に、加害者が考えるような思考の仕方だな。もう実行しちゃってるけど。

「まあ どの道、全然、無駄な気遣いだったわけだけれど」  
「だろうね」

「不死身って便利そうねって言われたら、傷つく？」

戦場ヶ原さんの質問。今度は答えた。

「今では、あまり思わない」

春休みだったら。人間の心を持ったときだったら そうは思えなかっただろう。普通に傷ついて、悲しんで、怒っただろう。

「もう、不死身ってわけでもないし、傷の治りが早いってだけだしな。鼠のことも合わせて除けば、他はただの人間だ」

他の、人間の部分が、どれだけ自分に残っているかは、判らないけどな。

「ふうん。そうなんだ」

戦場ヶ原さんはつまらなそうに呟いた。

「なら その鼠って便利そうねって言われたら、傷つく？」  
「傷つかない」

自分はそう断言した。春休みのときでも、そう答えただろう。

「……そうなんだ」

戦場ヶ原さんは今度は考えるように呟いた。

忍野さんがいるのは、大抵四階だ。いつもそこに居るとは限らないが、とりあえずは四階にいくため、自分は戦場ヶ原さんの手を引いたまま、階段を昇る。

「豪良くん。最後に言っておくけれど」

「どうしたの？」

「服の上からだそうは見えないかもしれないけれど、私の肉体は、案外、法を犯してまで手に入れる価値はないかもしれないわよ」

「……………」

「遠回しな言い方でわからなかったかしら？じゃあ具体的に言うわ。もしも豪良くんが下劣な本性を？き出しにして私を強姦し」

「無い。そんな事は絶対に無い。断言できる。劣情は無駄だ。欲情は無用だ。痴情は無益だ。愛欲は無意味だ。性欲は無意義だ。自分にはそんなものは無い。だからそんな事を言わなくていい。考えるな。思考するな。思うな。全てが 徒労だ」

戦場ヶ原ひたぎは、さつきから可笑しな 馬鹿げた事を言うてくるな。それは、灰鼠のことを 豪良絢爛のことを解っていないがゆえのことだろうがな。

「そう」

戦場ヶ原ひたぎは、自分の捲し立てるような物言いに驚いたように、そう一言だけ、呟いた。

「……………それにしても、よく、こんな、今にも壊れそうなビルに住んでいるわね その、忍野って人」

「……………まあ、変わり者だね」

露骨な話題転換だが、自分もそれに合わせる。さっきのは、少しばかり大人げなかつたかな。子供のようだったというべきか。これでも、昔よりは良い状態なんだけどな。

「どうにも正体不明ね。不審人物と言ってもいいくらい。一体、何をやっている人なの？」

「自分もあまり分かっていないけど。自分や、戦場ヶ原さんみたいなのを、専門でやっているらしいよ」

「ふうん」

戦場ヶ原さんの求めた回答とは、かなり違っていたが、自分も分らないのだから仕方がない。そのあいまいな回答にも何も追求してこないのは、実際にその目で見た方が早いと判断したということだろう。

そして四階。廃つても学習塾なので、教室のような造りの部屋が三つあるのだが。どれも扉が壊れており、もはや廊下と一体化している。その中から忍野さんを探そうと思い、一番近くの教室を覗いてみた。

「おお、豪良くん。やっと来たのか」

ビンゴ。忍野さんは、そこにいた。いくつもの、ボロボロの机どうしを繋ぎ合わせ出来た、簡易製のベットもどきの上に、胡坐をかいていて、こっちを見ていた。自分が来ることをまるで見通していた風に。いつもど通りの風貌でそこにいた。

「なんだい。豪良くん、今日はまた違う女の子を連れてくるんだ

ね。きみは会うたんびに違う女の子を連れてくるなあ　全く、同慶の至りだよ」

「自分をプレイボーイみたく言わないでくれよ。あと、忍野さんだけで喜びに至ってくれ」

「ふうん　うん？」

忍野さんは、戦場ヶ原さんを遠目に　その背後に、何かを見るように、眺めていた。

「……初めまして、お嬢さん。忍野です」

「初めまして　戦場ヶ原ひたぎです」

戦場ヶ原さんは　明らかに忍野さんの、汚らしい、清潔感の欠けた、アロハ服の風体に引いているはずなのに、一応は、ちゃんと挨拶をした。年上に対する礼儀作法は弁えているらしい。

「豪良くんとは、クラスメイトで、忍野さんの話を教えてもらいました」

「はあ　そう」

忍野さんは、意味ありげに頷く。そして、おもむろに、煙草を取り出し、口に啣えた。ただ、火はつけずに、啣えただけだった。そして、そのまま自分の方を向く。

「前髪が直線な女の子が好きかい、豪良くん」

「そんな、自分には無意義なことは訊くなよな。あえて答えるなら、好みなんて無い」

「だね」

忍野さんは笑った。もう少し真面目にしてほしいものだ。

「詳しい話は本人から聞いてもらうとして　戦場ヶ原さん、何か訊きたいことはある？」

「ええ、あるわ。この教室に入ってから、何よりもまず、訊いておきたかったことがあるの　あの子は一体、何？」

戦場ヶ原さんはそう言い、教室の片隅を指差した。そこには、膝を抱えるようにして、八歳くらいの、ヘルメットにゴーグルをした、肌の白い、やや灰色がかった金髪の女の子が、体育座りで座っていた。その少女を、何、と訊いたことから、何かであることを、戦場ヶ原さんは察しているようだ。

「別に、何でもないよ　あれは。影も形もない。名前も存在もなく、残っているのは灰燼だけの、そんな子供だよ」

「いやいや、豪良くん」

そこで忍野さんは訂正するように言った

「影と形。存在がなくて灰燼しか残っていないのはその通りだけれど、名前は昨日、つけてやったんだ。ゴールデンウィークにはよく働いてくれたし、それにやっぱり呼び名がないと、不便極まりないからね。それに、名前がないままじゃ、あの鼠くんが残ってもいつまでたっても彼女は凶悪なままだ」

鼠　灰鼠。自分が招いた存在。今は、自分の中にいない。正確には、春休みから　いない。能力だけ残して、本体はいなくなっ

ている。

「だろっね　ところで、どんな名前にしたんだ？」

「忍野忍、と名付けてみた」

「忍ねえ　」

忍野忍。なんだか逆のような気がするな。忍野メメ、こっちのほう  
が女の子ぽくって、萌えそっで。

「刃の下に心あり。彼女らしい、いい名前だろう？苗字は僕のを  
そのまま流用させてもらった。そっちにも幸い、忍の一字は入っ  
ているしね。二重にすることで三重の意味を持つ。我ながら、悪く  
ないセンスだと、結構気に入っているんだが」

「うん。苗字にかかっていて、語呂もいいし、いいセンスだと思  
うよ」

男のような名だろうが、女のような名だろうが、その名前は素直  
良いと思う。

「だから」

いい加減業を煮やした感じで、さっきからの不毛な会話を終わら  
すために、戦場ヶ原さんが言う。

「あの子は一体何なのよ」

「何ものでもないさ。戦場ヶ原さんには関係無いから、気にしな  
くていいよ。言うておくけど、犯罪は関わっていないから大丈夫だ  
よ」

犯罪はしていない。そもそも、人が決めた法には、こいつは当てはまらない。吸血鬼の成れの果て。美しき鬼の搾りかす。鼠すら追いつけない存在。こんなこと言っても、仕方がない。戦場ヶ原さんには、関係無いのだから、仕方がない。これは、自分が人として生きて、犯した、罪だ。罪状は、無期懲役。

「関係ないの。ならいいわ」

あまり、興味がなさそうな返事だ。当たり前だな、関係無いし。

「そんなことより」

戦場ヶ原さんは 忍野忍から、忍野さんに、視線を向けた。

「私を助けてくださるって、聞いたのですけれど」

「助ける？そりゃ無理だ」

忍野さんは茶化すような、欺くような、いつもどおりの口調で言った。

「きみが勝手に一人で助かるだけだよ、お嬢ちゃん」

「……………」

戦場ヶ原さんの目が半分くらいに細くなった。あときの、自分に対して向けていたものと似ている。

「私に向かって 同じような台詞を吐いた人が、今まで、五人いるわ。その全員が詐欺師だった。あなたもその部類なのかしら？ 忍野さん」



「はっはー。お嬢ちゃん、随分と元気いいねえ。何かいいことでもあったのかい？」

何を言われようがいつもの調子を崩さないな、忍野さんは。でも、そんな挑発するような言い方では、信頼関係は気づけないぞ。こういうのは、信頼関係が大事なんじゃなかったっけ？

「忍野さん。少しは、大人らしくしてくださいよ」

少し、呆れたように言った。

「わかったよ。豪良くん　ま、何せよ」

絶対にわかっていないだろう忍野さんは、気楽そうに言った。

「話してくらないと、話は先に進まないかな。僕は読心の類はどうも苦手だね。それ以上に対話するのが好きなんだ、根がお喋りなもんでね。とはいえ秘密は厳守するから、平気平気」

正直、この台詞だけ聞けば信用には値しないけど、忍野さんは大丈夫だ。喋るときは、本音しか言わない。まあ、隠し事はするだろうけど。

「じゃあ、とりあえず、自分が軽く説明を　」

「いいわ、豪良くん」

いよいよ、話の本題に入ろうとして、自分が話そうとすると、それを戦場ヶ原さんは遮った。

「自分で、するから」

「……そうか」

「自分で、できるから」

自身に、問うように、そう言った。

「おもし蟹」

戦場ヶ原さんが、自身の抱えている状況を語り終えたところで、忍野さんは「成程ねえ」と頷いて行った後、そう一言言った。

「おもしろかに？」

その一言だけでは、当然理解できず、戦場ヶ原さんは訊き返した。

「九州の山間あたりでの民間伝承だよ。地域によっておもし蟹だ

ったり、重いし蟹、重石蟹、それに、おもしろい神つてのものもある。この場合、蟹と神がかかっているわけだ。細部は色々ばらついていて、けど、共通しているのは、人から重みを失わせる　　ってところだね。行き遭ってしまうと　　下手な行き遭い方をしてしまうと、その人間は、存在感が奇薄になる、そうだ、とも」

「だいたいの正体と能力はわかったけど、何で九州の伝承とやらの存在が、こんなとこにいるんだ？あー、忍と同じ感じなのか？」

「忍ちゃんは例外だよ。そもそも、場所そのものに意味があるんじゃないからね、別に。そういう状況があれば　　そこに生じる、それだけだ」

「そうなんだ」

地理気候も重要だろうけど、あまり関係ないのか。

「この場合、別に蟹じゃなくてもいい。兎だって話もあるし、それに　　忍ちゃんじゃないけれど、美しい女の人だっていう話もある」

「じゃあ、灰鼠のような、小動物だって話もあるんだろうな」

「だろうね。でも、鼠くんも、忍ちゃん同様に例外だよ」

「それは自分でもわかってるよ」

なんせ、伝説の吸血鬼に喰われなかった存在だしな。

「まあ、お嬢ちゃんが行き遭ったのが蟹だっていうんなら、今回は蟹なんだろう。一般的だしね」

「なんなんですか、それは。名前なんて、そんなのは何だって構いませんけれど　　」

「そうでもないさ。名前は重要だよ。さっき言ったけど、蟹じゃ

なくて、元は神なんじゃないかってことさ。おもしろい神から、おもしろい蟹へ派生したってことだ」

これは、僕のオリジナルの説だけだね、と付け加える忍野さんだった。名前は大切だろう。特に、魑魅魍魎の類には。

「ま、お嬢ちゃんは、運の悪い中じゃあ運のいい部類だよ。」  
「どうしてですか」

「神様なんてのは、どこにでもいるからさ。どこにでもいるし、どこにもいない。お嬢ちゃんがそうなる前からお嬢ちゃんの周りにはそれはあつたし、あるいはなかったとも言える」

「禅問答ですね。まるで」  
「神道だよ。修験道かな」

どっちも、忍野さんは信じてはいないだろうな。我が道を行く人だし。

「勘違いするなよ、お嬢ちゃん。きみは何かの所為でそうなったわけじゃない。ちよつと視点が変わったただけだ」

自分の、灰鼠もそうなのだろうか。いや、これは招いただけだな。完全な自業自得だ。

「視点が？何が 言いたいんですか？」  
「被害者面が気に食わねえつつつてんだよ、お嬢ちゃん」

さつきからの、話っていた雰囲気とは打って変わって、唐突に、辛辣な言葉を、忍野さんは言った。自分と羽川のとくと同じように。だが、戦場ヶ原さんは、甘んじて受けたように、何も、返さなかった。

「へえ」

そんな戦場ヶ原さんを、忍野さんは、感心したように見た。

「なかなかどうして。てつきり、ただの我儘なお嬢ちゃんかと思っただけ」

「どうして　そう思っただんですか」

「おもし蟹に遭うような人間は、大抵そつだからだよ。遭おうと思つて遭えるもんじゃないし、通常、障るような神でもない」

「……障わない」

戦場ヶ原さんは、思うように呟いた。

「憑くものとも違う。ただ、そこにいるだけだ。お嬢ちゃんが何かを望まない限り　実現はしないんだ。いや、もっとも、そこまです事情に深入りするつもりはないけれどね。」

「……」

「とにかく。いいよ。わかった。体重を取り戻したいというなら、力になるさ。豪良くんの紹介だしね」

「……助けて　くれるんですか」

「助けない。力は貸すけど」

勝手に助かるだけ　忍野さんは、いつもそういう。決まってるように。そう思っているように。

「そうだね、まだ日も出ているし、一旦家に帰りなさい。それで、身体を冷水で清めて、清潔な服に着替えてきてくれる？こっちはこ

つちで準備しておくからさ。豪良くんの同級生ってことは、真面目なあの学校の生徒ってことなんだろうけれど、お嬢ちゃん、夜中に家、出てこられる?」

「平気です。それくらい」

「じゃ、夜中の零時ごろ、もういっぺんここに集合ってことで、いいかな」

「いいですけど」

そこで戦場ヶ原さんは、言葉を止めた。

「お礼は?」

「は?」

「とぼけないください。ボランティアで助けるといっわけではないんでしょう?」

「ん。ん」

忍野さんはそこで、自分を見た。値踏みするように。

「ま、その方がお嬢ちゃんの気が楽だっていうなら、貰っておくことにしようか。じゃ、そうだね、十万円です」

「……十万円」

「……自分のときは随分と違っているね」

「そうだった?委員長ちゃんるときも、確か十万円だったと思うけれど」

「自分はその四十倍の四百万円だ」

「吸血鬼だもん。仕方ないよ。これでも、鼠くんが頑張ってくれた分を、引いてるんだけどね」

「それは……そうだけど」

「払える?」

もうこれで話は終わりだと言わんばかりに、自分をあしらうようにして、忍野さんは、戦場ヶ原さんに問うた。

「勿論」

戦場ヶ原さんは、そう答えた。

「どんなことをしても、勿論」

あの話から、二時間後。自分は戦場ヶ原さんの家にいる。そこには、豪邸といわれている家はなく、民倉荘という名の、木造アパート二階建て、六畳一間の家があった。

なぜこんなアパートに、戦場ヶ原さんが住んでいるかというところ、母親が怪しい宗教に嵌り、財産を全て貢ぎ、しかも多額の借

金まで背負い、その結果去年の暮れに離婚し、父親に引き取られ、しかし多額の借金は残っており、父親はそれを返すためにあくせく働き、滅多に帰ってこなくなり、ほぼ一人暮らしの状態　と、いうわけらしい。

戦場ヶ原さんは、今身体を洗っている。自分がなぜここにいるかというと、簡単に言えばこの家から、学習塾への足というわけだ。自分は六畳一間の部屋にある、数少ない家具の内の箆笥に、もたれかかっていた。この部屋を見る限りでは、十万円というのは、通常以上に大金であろうと思える。

運の悪い中では、運のいい方と、忍野さんは言っていたが、中学時代の話の戦場ヶ原さんと、今を比べてしまうと、そうは思えてこない。自分も吸血鬼に襲われて、死んだ方が楽だと何度も思った。戦場ヶ原さんよりは運の悪い方であつただろう。だが、家庭事情に関しては戦場ヶ原さんの方が、圧倒的に、運の悪い方だ。

どのような思いなのだろう。この状況になつて。人を傷つけ、遠ざけるまでに至る人生とは、どのような思いなのだろう。重みを失った彼女。その思いは　わからない。

「シャワー、済ませたわよ」

そんなことを考えていると、戦場ヶ原さんが脱衣所から出てきた。全裸で。

「……えー？」

予想外。まったくもって訳が分からない。戦場ヶ原ひたぎは馬鹿



なのか？それとも、こう考えている自分が馬鹿なのかな。

「そこをどいて頂戴。服が取り出せないわ」

自分が背にしている筆筒を指差してそう言ってくる。自分は筆筒から離れて、言った。

「お前は服を着ろ」

「だから今から着るのよ」

「着て出てこいつで意味だつっの」

「持つて入るのを忘れていたのよ」

「タオルとかで隠せばいいじゃんかよー」

「嫌よ、そんな貧乏くさい真似」

威風堂々と、戦場ヶ原ひたぎは言った。羞恥心が発生するものと、貧乏くさいことじゃ、お前は前者を選ぶのかよ。自分は後者だ。断言できる。こんなオープンな女性の全裸を見ても、例えば性欲が減っていたとしても、まったくもって、興奮しねーし、できねーよ。

「清潔な服ねえ。白い服の方がいいと思う？」

「白の方がいいんじゃないのー」

「ショーツとブラは、柄ものしか持っていないの」

「知ーらーねーよー」

こいつ貞操観念が強いんじゃないのかよ。異性に何を訊いてんだよ。困るわ。困惑するわ。速く着替え終わってくれ。自分は、こういう馬鹿げた、予想外な出来事には、弱いんだよ。自分のまわりに、こんな風にしてくる人がいないから、どう接していいかわからない。

自分のキャラがぶれて仕方がない。

「もういいわよ。こっちを向いても」

「やっとか……」

自分は戦場ヶ原さんに振り向いた。下着姿であった。扇情的なポーズであった。予想外であった。

「おめー様は身持ちが硬いんじゃないのー？」

「何よ。今日のお礼のつもりで大サービスしてあげてるんだから、ちよつとは喜びなさいよ」

「……………」

お礼の仕方が極端すぎるわ。そんなことするなら、ホッチキスのこと謝れよ。

「ちよつとは喜びなさいよ！」

「逆切れい？」

「感想くらい言うのが礼儀でしょう！」

「えー、感想を？」

どーすりゃいいんだよ。えーつとな……。

「ミケランジェロのダビデ像のような芸術的価値があるものと思  
いました」

「……………最低」

マジかよ。ゴミを見るように唾棄されたよ。

「私を、全裸の男の像と同じにするなんて、そんなことだからあなたは一生童貞なのよ」

「まず、ミケランジェロに謝れ。そして、童貞は関係ないし、不名誉なことをいうな」

前者はともかく、後者はあっているだろうな。

「あら、童貞じゃないのかしら？性欲は無いって、あれほどほざいていたのに」

「……童貞ですよ。未体験ですよ」

男としてこれはどうなのだろうか。まあ、事実だから仕方がない。

「心配しなくとも」

言いながら、白いシャツを、水色のブラジャーの上から羽織る戦場ヶ原さん。

「羽川さんには内緒にしておいてあげるのに」

「どういうこと？」

「彼女、豪良くんの片恋相手じゃないの？よく話しているから、てつきりそう思ったのだけれど」

「違う、そんな思いは寄せてない。あれは単純に面倒見がいいだけだよ。羽川が一番駄目な奴が一番可哀想だって、そんな愉快的な勘違いしているんだよ」

「それは本当に愉快的な勘違いね」

戦場ヶ原さんはそれに同意した。

「一番駄目な奴が一番愚かなだけなのに」  
「まあ、一理あるな」

自分もそれに同意した。

「羽川さんも 忍野さんの、お世話になったのね？」  
「うん。そうだよ」

戦場ヶ原さんは、シャツのボタンを最後まで留め、その上から、白いカーディガンを着るようだった。上半身より、下半身の方が先に着たほうがいいと思うけど。

「ふうん」

「だから 信用していいと思うよ。あんな人だけど、腕は確かだから。自分や、羽川だってそういつてるんだしな」

「そう。でもね、豪良くん」

戦場ヶ原さんは言う。

「悪いけど、私はまだ、忍野さんのことを、半分も信用できてはいないのよ。彼のことをおいそれと信じるには、私は今まで、何度も何度も、騙され続けているわ」  
「……………」

戦場ヶ原さんは、五人の詐欺師に騙されてきた。全てに、騙されてきた。

「だから豪良くん。そんな楽天的な風には、どうしたって、ちっとも思えないの」

否定するように言い、戦場ヶ原さんは、カーディガンを脱ぎ始めた。

「何で脱ぐんだ？」

「髪を乾かすのを忘れていたわ」

「……………」

そんな初歩的なミスはしないでほしい。髪を乾かすためのドライヤーは高そうなものだった。この状況でも身だしなみは気を遣うようだ。

「別にさ」

自分は言う。

「楽天的に思ってもいいんじゃないの？」

「……………」

「悪いことも、ズルいことも、しているわけじゃないし、堂々とすればいいと思うよ」

「悪いことを しているわけじゃない、か」

戦場ヶ原さんは、自分の言った言葉を、繰り返すように言う。

「うん。そうだろ？」

「まあ、そうね でも」

戦場ヶ原さんは、そう言ったあとで、

「でも　ズルはしているかも」

と、続けた。

「ん？」

「なんでもないわ」

髪を乾かし終えた戦場ヶ原さんは、着衣を開始する。そして、しばらくして、またもや上着を脱ぎ出した。

「……今度は、またどうしたの？」

「服が裏返しで、しかも後ろ前だっただけよ」

「それはもう、意図してやらなければできないミスだぞ」

「でも確かに、服を着るのは得意じゃないの」

「あー、やっぱり、重いのか？」

「ええ、重たいわ」

鞆が重いなら、服も重いだろう。十倍の重さとなれば、着替えさえ、一苦労だろう。

「こればかりは、飽きることはあっても慣れることはないわ」  
「そうか」

慣れることはない　自分のように、慣れてはいけない。その後、戦場ヶ原さんは着替えていき、白いタンクトップに白いジャケット、白いフレアスカートに着替え終えたところで、言った。

「ふむ。決めたわ」

「何が？」

「もしも全てがうまく行ったら、北海道へ蟹を食べに行きましょ

「う」

「……行きましょってことは、もしかして、自分も？」

「そうよ。あなたも行くのよ」

「えっと、理由は？」

「あら、知らなかったの？」

戦場ヶ原さんは微笑した。

「蟹って、とってても、おいしいのよ」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2416ba/>

---

流転の化物語

2012年1月14日03時46分発行